



# 町内会短信11月号

霜月

2021年11月1日  
川沿中央第一町内会長  
柴田田鶴子

突然決定した衆議院戦の投票日(10/31)を目前にこの原稿を書いています。唐突の感のある菅首相の辞任、後を引き継いだ「聴く力」を強調する岸田首相は果たして「選挙の顔」となり得たかどうか…は多分この町内会短信が届く頃には、結果が判る筈です。

“物のあわれは秋こそまされ”という古文を引用するまでもなく「霜月」の晩秋感は数少ない町内会行事を通してひしひしと伝わってきます。月2回の「どんぐり公園清掃」での雪虫の飛び交うなか掃いても掃いても風が吹くたびにハラリ、ハラリと舞い落ちる楓や朴(ほお)の木(どんぐり)の落ち葉、己が樹の根本に枯れ葉色の茶を主張して、ピッシリ薄く広く降り積もらせているヒバの木等々が夫々に暮れゆく「晩秋」を主張しているようです。

また、国道の三角地帯の『ふれ合いガーデン』の花々も残すところ咲き遅れのコスモスや二度咲きのラベンダー、紫の濃淡様々な小菊等を残し、来春へ向けての土盛り肥料やり等の用意が垣間見られるのみです。

10月中旬回覧でご案内した「高齢者の聴き取り調査」を福祉部中心に役員4人が二手に分かれて実施しました。前回6、7年前に実施したきりで、当時の資料も古くなり、また、コロナ禍の為ここ2年間は高齢者関連の行事も全て中止となっております。

町内会福祉部としても、高齢者としての「数」は把握しても「個々人」としてのお顔が見えにくくなり、福祉の糸が繋がりにくくなっているのが現状です。

10月中旬より、福祉部・女性部を中心に役員二人一組で当町内85歳以上高齢者計71人52世帯のお宅を訪問しました。聴き取り項目は①同居家族の有無、②災害時に駆けつけてくれる支援者の有無、③町内会に対する要望・苦情の3項目です。

皆さまドアを開けて頂くまでは用心深い対応(当前?)でしたが、当該のご高齢者や同居の方も交えての聴き取り調査が終わり、役員が帰る時は玄関口までわざわざお見送り下さったり、手を振って下さったりと、我々も「お伺いして良かった」と達成感を味わいました。とても意義深い聴き取り調査でした。結果は後日福祉部よりご報告予定です。

10月の町内会行事実施報告	
10月3日(日)	部長以上役員会 10:30~ 於 地区センター調理室
10月6日(水)	ふれ合いガーデン整備実施日 8:30~9:30
10月13日(水)	どんぐり公園清掃日 Bグループ(6,7,8,9,10班) 雨天中止 →10/27に合同実施
10月15日~20日	高齢者実態調査実施 福祉部
10月27日(水)	ふれ合いガーデン整備実施日 8:30~9:30
10月27日(水)	どんぐり公園清掃日 9:30~10:30 Aグループ(1~5,25~27班),Bグループ(6,7,8,9,10班)
連合町内会関係 10月23日(土) 連合町内会理事会 6:30 於地区センター 会長出席	
11月の町内会行事予定	
11月3日(水)	どんぐり公園清掃日 9:30~10:30 Dグループ(16,17,18,19,20班)
11月7日(日)	町内会役員会 10:30~ 於 地区センター2階
11月17日(水)	どんぐり公園清掃日 9:30~10:30 Eグループ(21,22,23,24,28,29班)
11月27日(土)	子どもXマス会 2回に分けて実施 12:50,13:50~ 詳細は青少年部より回覧予定

裏面へ

**【川浴ふれ合いガーデン便り】** 春から道行く方々の目を楽しませてきたガーデンも 10 月 27 日 (水) で店仕舞い。27 日は協力者全員が集い、最後の後始末をしました。昨年末までお元気で私たちの仲間であった故米倉氏を偲びながら、来年春の再開を誓いました。

**お忘れになっていませんか? 赤い羽根募金** 中旬に斑回覧した赤い羽根募金、お忘れの方は至急班長さん宅へお届けください。封筒が無い場合は班長さんが余分にお持ちです。

## 郷土史より (視野を広げて) —クラーク博士の志 (4)

郷土歴史家 吉田邦行



明治 10 年 4 月 16 日、別れの日、クラーク博士の宿舎前で記念撮影後、生徒は馬で 24 km 先の島松まで見送った。生徒一人ひとりと硬い握手をし、馬上となったクラーク博士は、“Boys, be ambitious. Like this old man” 「少年よ、大志を抱け、この老人のごとく！」と叫ぶと、通訳と二人で乗船先の室蘭へ馬を急がせた。

それは挑戦することの大切さを、自分自身 (クラーク) の行動から学んでほしいとのメッセージであった。帰国後も生徒たちと手紙での交流が続いた。開拓に当たる姿勢から私生活に至るまで、愛情とユーモアあふれる内容でクラーク博士は、教頭であり続けたのである。帰国から 8 年後、教え子である新島 襄 (同志社大創設者) が、自宅で病床にあったクラーク博士を訪ねた。クラーク博士は、札幌での思い出を懐かしみ、夢中になって話したと言う。それから 10 ヶ月後、クラーク博士は 59 歳の生涯を終えた。最後にこんな言葉を残している。「日本で生徒たちと過ごした日々が、人生に於いて最良の時間だった」と。訃報を知った北海道大学の授業は、その日中止となり喪に服した。クラーク博士は、大志を持って来道し理想の大学を試みた。教え子たちがその精神を理解し、そして教え子たちによってクラーク博士は、伝説化されて行くのである。

「ボーイズ・ピー・アンビシャス」は、北海道の発展になくてはならない開拓を象徴する大切な言葉である。クラーク博士の強烈なメッセージは、誇り高きアメリカ人の開拓魂が込められた言葉と受け取れる。クラーク博士が帰国から 12 年後の 1889 年、ホルスタイン (日本への導入は 1885 年、繁殖後各地へ) 雌牛 3 頭が導入された。ホルスタイン種の乳量は、他品種に比べ 3 割増しとなり、北海道の酪農は大きく発展をして行くのである。学生たちは血統記録簿で管理して、大切に育て繁殖させていった。現在、北海道は全国牛乳生産量の 4 割を占めている。

北海道大学の構内には、当時のモデル家畜房が現存している。1 階は牛馬飼育場、地下は豚飼育場、2 階には大きな扉が有る。扉に向かって 2 階床の高さまで土を盛り、直接馬車ごと飼料を運び入れるための構造である。2 階床には下に飼料を落とすための開口部が、設けられている。(つづく)